

PRESS RELEASE_2023.4

第25回亀倉雄策賞受賞記念

岡崎智弘 個展「STUDY」

2023年6月6日(火)～6月28日(水)

三澤遥 個展「Just by」

2023年7月4日(火)～7月27日(木)

1997年に急逝したグラフィックデザイナー亀倉雄策の生前の業績をたたえ、グラフィックデザインの発展に寄与することを目的として、1999年、亀倉雄策賞が設立されました。この賞の運営と選考は公益社団法人日本グラフィックデザイン協会(JAGDA)が行い、毎年、年鑑『Graphic Design in Japan』出品作品の中から、最も優れた作品とその制作者に対して贈られます。

第25回となる今回は、岡崎智弘の放送局の番組コンテンツ映像「デザインあneo あのテーマ」、および三澤遥の幼稚園のサイン計画「玉造幼稚園」がそれぞれ亀倉雄策賞に選ばれました。

岡崎の作品は、「あ」の一文字と白い紙のみを素材とした、放送局の番組コンテンツ映像。選考委員からは「コマ撮リアニメーションというありふれた手法を深く追求し、他の追隨を許さない領域に達して世界にも類を見ない」「イメージがどのような視覚体験として伝わるかというグラフィックデザインの原点を感じさせる」などと評されました。

また三澤の作品は、円筒形を駆使した立体造形と独特の配色による、幼稚園のサイン計画。「この数年、高いレベルで受賞を競ってきた三澤の仕事に共通するデリケートさを持った作品」「今回はさらに新たなデザインの切り口を発見し定着させた仕事で、表現の幅の広さを見せた」などの評価を得て、亀倉雄策賞としては初めてとなる2作品の同時受賞が決定しました。

この受賞を記念し、6月に岡崎、7月に三澤による個展を開催いたします。

以下に、企画概要をご案内いたしますので、ご高覧の上ご紹介いただきたくお願い申し上げます。

展覧会概要

■企画展名 第25回亀倉雄策賞受賞記念
岡崎智弘 個展「STUDY」
三澤遥 個展「Just by」

■会期 岡崎智弘 個展:2023年6月6日(火)～6月28日(水)
三澤遥 個展:2023年7月4日(火)～7月27日(木)
11:00-19:00 日曜・祝日・6月29日(木)～7月3日(月)は休館 入場無料

- 会場 クリエイションギャラリーG8
〒104-8001 東京都中央区銀座8-4-17 リクルートGINZA8ビル1F
TEL 03-6835-2260 <http://rcc.recruit.co.jp/>
- 主催 クリエイションギャラリーG8
- 共催 公益社団法人日本グラフィックデザイン協会、亀倉雄策賞事務局
- トークショー クリエイティブサロン①
日時 2023年6月14日(水) 19:10-20:40
出演 岡崎智弘、辻川幸一郎、中村勇吾、渡邊敬之(北千住デザイン) ※敬称略
- クリエイティブサロン②
日時 2023年7月7日(金) 19:10-20:40
出演 岡崎智弘、三澤遙、角尾舞 ※敬称略
- クリエイティブサロン③
日時 2023年7月19日(水) 19:10-20:40
出演 三澤遙、有元利彦(HIGURE 17-15 cas)、久保匡(国立科学博物館) ※敬称略
- 参加無料 会場開催+ライブ配信(予定)
要予約(詳細はギャラリーWEBサイトをご覧ください)

■これまでの亀倉雄策賞受賞者

第1回 田中一光／第2回 永井一正／第3回 原 研哉／第4回 佐藤可士和／第5回 仲條正義／第6回 服部一成／
第7回 勝井三雄／第8回 受賞者なし／第9回 松永 真／第10回 佐藤 卓／第11回 植原亮輔／第12回 浅葉克己／
第13回 受賞者なし／第14回 澁谷克彦／第15回 平野敬子／第16回 葛西 薫／第17回 佐野研二郎／
第18回 三木 健／第19回 渡邊良重／第20回 中村至男／第21回 色部義昭／第22回 菊地敦己／第23回 田中良治／
第24回 大貫卓也 ※全て敬称略

掲載書籍:年鑑『Graphic Design in Japan 2023』(2023年7月発行予定／六耀社刊／予価16,500円)

- お問い合わせ 株式会社リクルートホールディングス リクルートクリエイティブセンター
企画担当:片野 TEL 070-1463-1372 k_katano@r.recruit.co.jp
※ビジュアル画像をご入り用の際は、お手数ですが担当までご連絡をお願いいたします。

■第25回亀倉雄策賞選考経緯

■第1次選考(2022年11月29日、12月12日)

- ・年鑑『Graphic Design in Japan 2023』掲載作品選考会において、全国のJAGDA会員から出品された全2,106作品を対象に、年鑑選考委員29名が候補作品を選出。
- ・選考会2日目に出席した選考委員27名が、各カテゴリーの得票上位であるJAGDA賞の候補129作品から、亀倉雄策賞の過去の受賞者の作品44点を除いた85作品を対象に、亀倉雄策賞にふさわしいと思われる作品を各自5つ選んで投票。その結果、22作品を候補として選出した。(全票投票/出品者名は非表示/自身の作品には投票不可)

■最終選考(2022年12月20日)

- ・ひとり(1組)あたり1作品を候補とするというルールに従い、複数作品が候補に挙げられた出品者については多数決で各1作品に絞り、以下の17作品を最終的なノミネート作品とした。
- ・一次選考として選考委員10名がひとり3票を持ち投票を行ったところ、7票と6票がそれぞれ1作品、3票が2作品、2票が4作品となった。ここで各選考委員がそれぞれ評価する作品についての見解を述べ、議論を交わした。その結果、得票上位4作品に議論で浮上した2作品を加えた計6作品(岡崎、関本、高田、永井一史、林規章、三澤の作品)を候補として残すこととした。
- ・6作品に対してひとり1票持ちで投票したが、いずれも過半数には届かなかつたため、得票上位の岡崎・三澤の両作品を対象として決選投票を行った。結果はそれぞれが5票の同数となり、さらに議論した結果、いずれも受賞にふさわしい優れた作品という点で意見が一致し、亀倉雄策賞としては初めてとなる2作品の同時受賞が決定した。
- ・岡崎の作品は、「あ」の一文字と白い紙のみを素材とした、放送局の番組コンテンツ映像。選考委員からは「コマ撮りアニメーションというありふれた手法を深く追求し、他の追随を許さない領域に達して世界にも類を見ない」「イメージがどのような視覚体験として伝わるかというグラフィックデザインの原点を感じさせる」「ポピュラーなメディアの場で先端的な表現を成立させた」と評された。
- ・三澤の作品は、円筒形を駆使した立体造形と独特の配色による、幼稚園のサイン計画。「この数年、高いレベルで受賞を競ってきた三澤の仕事に共通するデリケートさを持った作品」「既存の建築資材を活用するなどローコストに努めながら、高いクオリティを保っている」「今回はさらに新たなデザインの切り口を発見し定着させた仕事で、表現の幅の広さを見せた」といった評価を得た。

■最終選考委員会メンバー(※五十音順、敬称略)

- ・亀倉雄策賞運営委員=永井一正(選考委員長)、浅葉克己、葛西薫、菊地敦己、佐藤卓、服部一成、原研哉、松永真
- ・ゲスト選考委員=操上和美(当日欠席)、保坂健二郎、山本容子

■候補作品(※出品者名五十音順、敬称略)

- ・環境・空間「mt ex at L/C」(居山浩二 cl: カモ井加工紙)
- ・環境・空間「2121年 Futures In-Sight展」(上西祐理 cl: 21_21デザインサイト)
- ・映像「デザインあ neo あのテーマ」(岡崎智弘 cl: NHK)
- ・環境・空間「対馬博物館」(木住野彰悟 cl: 対馬博物館)
- ・デジタルメディア「ユーミンをめぐる物語」(窪田新 cl: ソニー・ミュージックレーベルズ)
- ・複合「丸亀うちわ」(小杉幸一 cl: 讃岐リミックス実行委員会)
- ・デジタルメディア「演奏図案」(坂本俊太 cl: 坂本俊太)
- ・雑誌広告「無印良品キャンプ場」(新村則人/庭野広祐 cl: 良品計画)
- ・複合「レモンノキ」(関本明子 cl: レモンノキ)
- ・複合「高田唯 混沌とした秩序」(高田唯 cl: ギンザ・グラフィック・ギャラリー)
- ・ポスター「人のためのグラフィックデザイン」(玉置太一 cl: 日本大学芸術学部)
- ・CI・ロゴ「Juchheim」(永井一史 cl: ユーハイム)
- ・CI・ロゴ「ミロ展—日本を夢みて」(永井裕明 cl: 富山県美術館)
- ・複合「千曲川橋梁復旧記念事業」(林俊美 cl: 上田電鉄/長野県上田市)
- ・ポスター「女子美術大学大学院&3年次編入/短大専攻科 学生募集」(林規章 cl: 女子美術大学)
- ・複合「香林居」(藤田佳子 cl: 西松建設)
- ・環境・空間「玉造幼稚園」(三澤遥 cl: 玉造幼稚園/ジャクエツ)

[記: 亀倉雄策賞事務局]

■プロフィール



岡崎智弘 Tomohiro Okazaki

1981年神奈川県生まれ。2003年東京造形大学デザイン学科視覚伝達専攻を卒業。広告代理店、デザイン事務所勤務を経て、2011年9月よりデザインスタジオSWIMMINGを設立し活動。グラフィックデザインの姿勢を基軸に、印刷物/映像/展覧会など視覚伝達を中心とした領域を柔軟に繋ぎながら、仕事の規模を問わず、文化と経済の両輪でデザインの活動に取り組んでいる。デザインの仕事は、自分が知らない世界や事象と向き合う機会となることや、人や社会と繋がる行為となること、また世界の捉え方や構造を発見し関与することができるものであり、その可能性に大きな魅力を感じている。

<https://www.swimmingdesign.com/>

■受賞のことば

亀倉雄策さんは私にとって本の中で出会う人です。学生時代から数々の作品や言葉と接してきました。

受賞作品の「デザインあneo あのテーマ」は、子供達に向けたテレビ番組の中のひとつのコーナーです。この世界を自分の目で見たり、何かを自分の手でつくろうとする時の、その手前にある気づきや心の有り様をテーマに、「あ」と「丸い穴」という要素のみで、視覚的な実験を積み重ねて構成したコマ撮り手法による映像です。映像が映るテレビが置かれた部屋に生まれる空気感や、テレビの前でじっと観察する子供の姿、そのような場面と時間の中にある豊かさとは何か?と想像しながら取り組んだ仕事です。

思い返してみると、この「デザインあ」というテレビ番組の仕事が、若き日の私にとって映像をデザインするきっかけとなった初めての仕事でした。発端は、私が誰からも頼まれずに自分だけで面白がり制作したコマ撮り映像を、運良く、尊敬する「つくる人」が観てくれて、誰も知らなかった私を発見してくれたことでした。その時、「つくったものが、私をあたらしいところへと連れて行ってくれた」と、もがき閉ざされた小さな私の世界から、広大で未知なる空間へとポンと身を置かれたように感じた心の感触を、しっかりと覚えています。

それから10年ほど、この表現の探求を続けながら、様々なデザインの仕事をしていく中で、幸運にも多くの「つくる人」と出会い、沢山の影響を私自身が受けながら、時間を過ごしてきました。私のまわりにいる「つくるのが好きな人達」はとてもキラキラしています。つくられた物や発せられる言葉に、私はいつも心躍る思いで反応してしまいます。「つくるのが好きな人」はきっと「つくっている人」が好きなのだと思います。

亀倉雄策さんとは直接お会いしたことも、お話をさせていただいたこともありません。それでも、「つくる」ことで、様々な「つくる人」との繋がりが生まれたように、今つくろうとする自分の指先のずっとずっと延長線上の向こうのほうに、沢山のつくる人を介しながら、もしかしたら、亀倉雄策さんと繋がっているのかもしれないと、想像する機会となりました。デザイナーは、各々が個で仕事に取り組んでいたとしても、私たちに通底する大きな「つくる人の文化」に、いつだって接し繋がっているのだと感じました。そして、故人に出来なく、今生きている私達に出来ることは「つくる」ことなのかもしれません。もがいても楽しみ、つくることを続けていきたいと思えます。

岡崎智弘

■プロフィール



三澤遥 Haruka Misawa

1982年生まれ。武蔵野美術大学卒業後、デザインオフィスnendoを経て、日本デザインセンター原デザイン研究所に所属。2014年より三澤デザイン研究室として活動開始。ものごとの奥に潜む原理を観察し、そこから引き出した未知の可能性を視覚化する試みを、実験的なアプローチによって続けている。主な仕事に、水中環境を新たな風景に再構築した「waterscape」、かつてない紙の可能性を探求した「動紙」、国立科学博物館の移動展示キット「WHO ARE WE」、隠岐ユネスコジオパークの泊まれる拠点「Entô」のアートディレクション、上野動物園の知られざる魅力をビジュアル化した「UENO PLANET」がある。

<https://misawa.ndc.co.jp/>

■受賞のことば

私には未完プロジェクトがいくつかある。敢えて、完成させないようにしている。例えば、紙の可能性を探求する『動紙』はそのうちのひとつで、5年に亘って研究している。まだまだこれから、10年、20年と続けていくかもしれない。継続的な試みの中にしか見えてこないものづくりの質を追求し、仲間と数々の実験や検証をしていく時間は、まるで社会との接点を暗闇で探るようで、地道ながら刺激に満ちている。わくわくすることもあるし、途方もない気持ちになることもある。つくることで、もっとわからなくなることもある。つくり続けるその先で何に出会えるかはまだわからないが、想像も及ばないものと遭遇できる可能性に大いに期待し、つくることを止めないでおく。これまで制作発表した作品も、まだ変化している途中の状態かもしれない。そう捉えてみると、まだまだ先の姿を考えてみたくなる。まだまだ、をつくる。すると、まだまだ面白がれる。まだまだ、の思考が次に進む力となる。

玉造幼稚園のサインは、金属の輪っかの組み合わせから成る。これらはすべて、輪っかの大きさ、重なりやずれの違いから生まれた簡潔な形状をしている。一見、オブジェや彫刻のようなサインらしからぬ佇まいは、子どもたちに観察し想像することを問う。これはなんだろう、と。サインに書かれた文字がまだ幼くて読めなくても、彼らは柔軟な発想で周辺や世界を捕まえようとする。子どもたちのことをそっと近くで見守るような、柔らかなコミュニケーションをサインに。最初から具体的なイメージを決めず、原寸の紙模型で検証を重ね、要素を削ぎ落としながら造形やストーリーを編集して構築していくプロセスは、これまで三澤デザイン研究室が繰り返し行ってきた実験と検証の延長にある。

最近になってようやく、未完プロジェクトが多種多様なかたちでつながり始め、絡まり合い、広がり出している。でも、まだまだ。これから先が、きつともっと面白い。

三澤遥

■ビジュアル資料

岡崎智弘

放送局の番組コンテンツ映像「デザインあneo あのテーマ」(cl:NHK)



三澤遙

幼稚園のサイン計画「玉造幼稚園」(cl:玉造幼稚園/ジャクエツ)

